

鍛冶師ですが何か！

えん ま
閻魔

いわずと知れた
冥界の主。

スミス・シュミート

キョクロブス
一つ目の巨人で、翼竜街唯一の
鍛造鍛冶師。

サビオハバリー

異世界にあるシュバルツティーフェ
の森を治めている賢猪。

フェイオンブウ

森で傷ついていた
賢虎。驍廣と
行動をとにする。

つ たけ ひろ
津田驍廣

代々刀鍛冶の家系で、
本人も刀鍛冶を目指していた。
十八歳の誕生日に死んでしまうが、
元の記憶を持ったまま、
異世界で鍛冶師となる。

シエーシャ
紫慧紗

冥界にいた
龍族の女の子。
驍廣にくっついて
異世界へ渡る。

ハニ
蛭偉

翼竜街の修練場を
任された猛者。

ヨウ ヒ レイ カ
耀緋麗華

翼竜街を治める
耀安劉の第三公女。

主な
登場人物

目次

プロローグ	事故で死んでしまいましたか何か！	7
第一章	冥界 ^{めいかい} に行くんですが何か！	12
第二章	異世界の森ですが何か！	74
第三章	翼竜街ですが何か！	117
エピローグ	悪意の胎動 ^{たいどう}	289

プロローグ 事故で死んでしまいましたが何か！

春四月、桜の花が舞い散る季節のこと——今日は俺の誕生日だった。

この『約束の日』を迎え、やっと夢への一步が踏み出せる！……と思っていた矢先にこんなことになるんだから、人の一生なんてホント一寸先は闇だ。

そんなことを考えながら、俺は数メートル上から、何も映さぬ瞳で虚空を見つめる、物言わぬ屍となった自分の体を見下ろしていた。

俺——津田驍廣は、十八歳の誕生日にこの世を去ることになってしまったのだ。

これで俺の人生が終わるのかと思うと、あまりにも短くて悔いが残る。

人生をかけてやりたいことがあったのに、それが果たせず、魂だけの存在となってしまった。

俺は、親父と同じ刀鍛冶になりたかったんだ。

赤ん坊の頃から、金鍔の音を子守唄にし、ヨチヨチ歩きができるようになると鍛冶場に行き、

真っ赤に熱せられた玉鋼とそれを扱う親父の姿に憧れた。

そう、俺は物心つく頃から『将来刀鍛冶になるんだ！』と思い定めていた。

津田家は江戸時代から続く刀鍛冶の家系で、俺の家はその傍流だった。

かつて『折れず、曲がらず、よく斬れる』が求められていた日本刀は、江戸時代には『腰に差すだけで抜くことはない、見栄えのする守り刀』となっていた。

そんな風潮の世で、津田の刀は江戸の『虎徹』と並び称されるものだったらしい。

だが、俺のご先祖様である津田武廣は、実戦を追求するあまり、妖刀『村雨』を生みだしてしまった。

本来、刀は人を斬ればその刀身に血脂が付き、斬れ味が鈍っていくものだ。しかし、妖刀『村雨』の刀身は常に水滴が浮かんでいるせいで血脂を寄せつけず、何人斬っても斬れ味が落ちることはなかったと言われる。

人を斬ることを最大の目的とした刀ゆえに、忌むべき刀『妖刀』とされた。

そこまで斬れる刀にこだわった理由は、御先祖の津田武廣が刀鍛冶であると同時に、実際に剣を振るった剣客でもあったため、らしい。

大坂で五指に入るほどの剣客だった武廣は、斬れる刀を欲し、自らの鍛え上げた肉体を用い、剣客として培った闘気（気）を金鍔に込めて刀を打った。その結果、妖刀『村雨』を生みだすに至ったのだ。

しかし『妖刀』のレッテルは、刀鍛冶にとって最も避けたい蔑称。

本家から疎まれてしまった津田武廣は、大坂を追われ、信州の山間に居を構える。そして、鍛え上げた肉体で己が闘気を込めて鍛える作刀法が、その地で連綿と受け継がれることとなった。現在、信州の津田家は、居合道や古武術を修業する人々に、『斬れる刀』を鍛える刀鍛冶として名が通っている。

親父も、若い頃は野山を駆け、古武術『津武流』——これは元を辿ると津田武廣に行きつく武術らしい。持ち前の剣術に、移り住んだ信州の山間に伝わる武術を融合させて総合武術に昇華させ、名も津田から津武に変えたんだそうだ——の道場に通い、体を鍛え、刀鍛冶に打ち込んでいた。

鍛え上げられた肉体と真つ赤に熱せられた鋼との真剣勝負。その果てに生みだされる妖しくも美しい刀。それは俺を虜にするのに十分すぎた。

俺は親父と親父の打つ刀に憧れ、幼い頃から津武流古武術道場に通い、血尿が出るほど絞られてもやめなかった。それだけでは満足できず、中学に入ると西洋拳闘や近くの禅寺で座禅を組むなど、心身ともに修行に励んだ。そして、やっとの思いで鍛冶場に入るのを許されたのが、三年前の十五の春だった。

それからは親父に付いて鍛冶師の修業をし、刀は打たせてはもらえないものの、副収入用に販売していたナイフや鉈などを作らせてもらっていた。

ナイフに関しては、親父よりも俺のような若者のセンスで打った物の方が受けがよく、インターネットで注文を取るようになると、俺の打つナイフばかりが売れた。このことは、お袋に家計の救世主と喜ばれた。

まあ、時にはククリナイフやらパタ（籠手付きナイフ）なんて、何に使うんだ？ と危ぶむ注文まで入ったが、『お客様は神様です』精神で作ったよ！ 色々だね。

そんな日々を送る中、今年の年明けに親父から、

「十八歳の誕生日を機に、一本打ってみろ」

と、ついに作刀のお許しが出た。

それから四カ月。長かったあゝ。一日千秋の思いというのは、まさにこのことだろう。

古武術の鍛錬、座禅、ジムワークと、日々の鍛冶修業に明け暮れ、待ちに待った十八の誕生日。

ついに今日その日を迎えた。

朝からソワソワし、学校に行っても授業に集中できるわけもなく、ただひたすら少しでも早く授業が終わることを願った。

そのせいで、担任の山崎先生に「津田！ 何を上の空で授業を受けとるんだ！」と怒られ、悪友の加瀬には「何ソワソワしてるんだ？ 十三代目」などとかかわれてしまった。

『十三代目』は俺のあだ名で、俺が小学校の卒業文集に『僕はお父さんの跡を継いで刀鍛冶になる！』って書いたもんだから、それ以来このあだ名になってしまった。ちなみに親父が十二代目津田武廣だ。

幼馴染で小さい頃から散々俺たちを泣かしていた、津武道場の一人娘、『姐鬼』こと津武雅美は「ちゃんと授業受けないとだめだよ、驕ちゃん」などと言って世話を焼こうとする。しかも、それを見ていたクラスの男どもには「嫁の尻に敷かれてんなよ」とからかわれ、雅美を慕う女どもに

は殺意を抱かれる始末。

ガキの頃は勝気で男の子とよく間違えられていた雅美も、高校に入ると途端に女っぽくなった。毎日道場で鍛えているので贅肉などないくせに、出るところは出ている上、持ち前の凛とした風貌とあいまって、今じゃ女子生徒憧れの『オネエサマ』だ。だが、本人はそんなことはお構いなしに、いや、むしろ俺の『嫁』と言われるのを喜んでいる節もあり、調子にのって色々俺の世話を焼きたがるのだ。

——とまあ、いつもとあまり変わらない学校生活を終えて、俺は家の鍛冶場に向かおうと家路を急いでいた。しかし、途中でボール遊びをしていた幼児が、車道に転がったボールを追いかけて飛び出すのを見てしまった。

で、お約束のように、そこへトラックが突っ込んできて……咄嗟のことなんて無意識に体が反応していた。俺は子供を突き飛ばすように避難させたが、俺自身はトラックを避け切れず……

何をやってるんだよ！ 俺は……

第一章 冥界に行くんですが何か！

いやゝ自分の葬式を見られるとは思ひもしなかった。

しかし、嫌なもんだよ、親に泣かれるつてのは……

お袋は泣くだらうと思つていたけど、まさか親父まで人目を憚らずに号泣するとは想像してなかった。

正直キツイよなあ……

それに、雅美まで大泣きして、棺に入っている俺の顔を「目を覚ませゝえ」って言いながらピンタを連発するし。正直、見てるだけで頬が腫れてきそうだったよ。

ついでに「お嫁さんにしてくれるつて言つたじゃない！ 約束守れゝ!!」つて、こともあるように幼い頃の戯言を通夜の席で暴露するなんて、まったく……

あと、親父に内緒で打った小鳥様式（日本刀の一つで、刀身の切先から中間部まで両刃になっている平家の守り刀とされた太刀）の脇差が、俺の守り刀としてちゃんと棺に納められていた。俺が黙つて刀を打つていたことを、親父は分かつていたんだな。やつばまだまだ親父には敵わない。

家族や友人の悲しむ姿を見続けた俺は、茶毘にふされた途端、棺に納まつていた鍛冶師衣装に小

鳥の脇差を腰に差した姿へと変わった。

それから一週間――

葬式が終わり、冥界への旅装束も整つたわけだが、俺は未だこの世でフウゝワフワと漂っている。これつて所謂『浮遊霊』つてヤツなんだろうか？

かといつて成仏の仕方なんて知らないし、どうしたものか……

家のことは、出来のいい弟と妹がいるから大丈夫だし、泣いていた雅美も友達が多いヤツだから、俺がいなくなつても時間が解決してくれるだろう。ということは、俺の成仏を妨けているのは、俺自身の刀鍛冶になりたいいって思いなのだろうか？ そんなことを考えていると、

「オイ、貴様、津田驍廣だな」

いきなり声をかけられ振り返ると、馬に乗った、銀髪で神社の神主が身に付けるような狩衣を着たイケメンが、俺を睨んでいた。

微妙に距離を取り、馬上から見下ろすような視線をぶつけてくるイケメンを、何だか偉そうなヤツだなあ、と思いつつ黙っていると、

「何を黙っている、お前が津田驍廣だな!?」

苛立った声で再度尋ねてくる。

「そうだけど、おたくさん誰？ 人に名前を尋ねる前に、自分から名乗って欲しいもんだねえ」

そう言いながら俺が近付こうとすると、イケメンはソソソッと距離を取りつつ、

「我が名は那吒なたく、閻魔王えんまおう様の使いで赴おもむいた。これよりお前を冥界めいがいに案内してやるからついて参れ！」
閻魔王様えんまおうさまって所謂、閻魔王様えんまおうさまだろう。けど、俺はこういう上から目線の生意気なヤツってのはあまり好きじゃないし、言葉通りに従うのも癪しやくにさわる。とはいえ、この宙ぶらりんの状況の方がもっと居心地が悪いので、仕方なくコイツに付いていくことにした。

だが、コイツはなぜか俺が近付くと、近付いた分だけ遠ざかる。

上役の命令で仕方なく来たからかもしれないが、それにしたって愛想がなさすぎる。

「冥界めいがいって遠いのか？ 一体どんなところなんだ？」

そう聞いても、チラ見をするだけで無視された。その態度にイラついた俺は、那吒に一足飛びに近付き、その腕を掴んで、

「おい！ 聞いてんのか!？」

ちよつと大きな声を上げた途端――

「ゴメンナサイ、苛いらめないでえ〜!!」

那吒は半ベソをかきはじめた。そのあまりの豹変ひょうへんぶりに、

「い、いや別に苛いらめてないし……」

「でも怒ってるんでしょ？」

「怒ってないよ、無視するからちよつとイラついただけ。でも、なんで無視すんだよ？」

「だって、現世の人って怖いんだもん……」

「何が怖いんだよ。大体、閻魔王様の使いつてことは、お前も一応神様かなんかだろ？」

「うん、でも修行中の身だから……。ホントに苛いらめない？」

「苛いらめねえって。お前を苛いらめてどうすんだよ」

「……うん、そっか」

涙目がコロッと笑顔に変わってしまった。……まあ、泣き顔よりいいんだが。

那吒の話だと、最近は神様を神様とも思わない人間が増えて、冥界めいがいでも力のある者でないと対応に苦慮するようになってしまっているらしい。しかも、俺が腰に差している脇差から、千手観音せんじゆかんのん様の力を感じ、仏の力を身に宿している者だと思ひ込んで、余計に怖かったとのこと。

俺が鍛冶師として打った物には、必ずそれに合うと思う梵字ぼんじを銘の代わりに刻んでいた。

今差している脇差には、俺の干支えとの守り本尊ほんぞんである千手観音菩薩ぼさつの梵字ぼんじが刻んであるんだが、それが閻魔王の使いを怖がらせる原因の一つになるなんて……

梵字ぼんじって本当に力があるんだなというか、言霊ことだまって本当にあるんだな。でも――

「怖いからって偉そうな態度を取るのはどうなんだよ？」

「舐なめられちゃいけないと思って……」

何だか子供のようなカワイイ発想に、俺のイラつきも消えていった。

そんなことを話している内に、黄泉路よみじを通り抜けたが、まさか富士山が、黄泉路よみじの入口だとは思わなかった。

三途さんずの川では、脱衣婆だつえぼや懸衣翁けんえおうと、鍛冶師衣装を「脱げ!」「脱がない!」で一悶着ひとしめし起こした。あまりにしつこいので本気で怒ったら「老人を労いたわれ〜!」と泣かれた。結局、渡し船には乗らず

泳いで渡る。さらに歩いていくと、とてつもなくデッカイ城壁のような中国風建築——塀の異常に高い紫禁城しきんじやうのような建て物——が見えた。

「あれが閻魔王様のおられる冥府だよ。普通に歩くとあと三日くらいはかかるんだけど、驍廣せうくわうなら半日も歩けば着くかな」

那吒の言葉に、なんで俺だと普通の人の六分の一？　と思いつつも、その建物を目指して進んでいった。すると、確かに半日ほどで門の前に着く。真下に立つと、てっぺんは霞もやがかって見えなほど高い。

「開門！　閻魔王の言いつけにより津田驍廣殿をお連れした！」

門に着くと、下馬した那吒が、それまでナヨナヨしていたとは思えないほど大きな声で告げる。

そして、その声が消えるか消えないかの内に、ゆっくりと門が開き、絵本に出てくるような虎皮のパンツに金棒かなぼう（金砕棒かなさいぼう）を持った『鬼』が現れた。

「これは那吒嬢ななぢやう、ご苦労さまでした。閻魔王様が裁きの間まにてお待ちでございます。お急ぎください」

鬼は、その風貌ふうぼうからは予想できないような優しげな声で告げる。が——

「嬢？」

思わず声を出して那吒を見ると、那吒は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら頬ほおを膨ふくらませ、

「い、いいから、早く行くよ!!」

と、俺を急せかした。

綺麗な顔のイケメンだと思っていたが、それもそのはずだ。

女の子なんだから。

気付かなかったことに、俺もまだまだ未熟だなあと思いつつ、急せかされるままに『裁きの間ま』とやらへ向かった。

いくつもの通路を通り、いくつもの部屋を抜けて、やっとの思いで裁きの間まに着く。冥府が見えてから門に到着するまでの時間よりかかるって、どんだけ広いんだよ……

那吒は、裁きの間まの扉の前で一度大きく深呼吸をし、

「津田驍廣殿をお連れいたしました！」

と叫び、扉を開けた。俺も那吒に続いて中に入ると、先客と話し込んでいた閻魔様が、俺たちに気付いたようで、こちらに顔を向けた。

「おお、よく参られた驍廣殿、那吒もご苦労だったな」

閻魔様が声をかけるのに合わせて、先客も振り向いた。

中国古式の衣冠束帯いこんそくたいを着けたその人物の顔は——龍だった。

「龍！」「伯父上！」

俺と那吒の口から同時に声上がる。すぐに、那吒は俺を見て眉を吊り上げ、

「失礼な、難陀龍王様なんだに向かって『龍！』なんてっ！　伯父上、この者はい今しがた冥界めいかいに参りましたゆえに、礼儀に疎うとうございます。無礼の段、ひらにご容赦ようしやください!!」

那吒は俺の頭を掴んで、無理やり下げさせようとする。

俺も、自分の物言いが失礼だったと思っていたので、那吒の手を振り払い、改めて自分から頭を下げた。

「失礼しました！」

難陀龍王は穏やかな表情で頷き、

「よいよい、儂の顔を見れば驚くのは当たり前じゃ、気にせずともよいぞ」

俺はその言葉を聞いて、もう一度お辞儀をすると、那吒に向き直った。

「おい！ 伯父上つてどういことだ？ まさか、お前も龍神様か何かなのか？」

「那吒媛、何も言わずにお連れしたのか？ 仕方のないヤツじゃ。驍廣殿、その者は我が一族八大龍王が一人、和脩吉龍王——日本人のそなたには九頭龍王と言った方が分かるかのう。その末娘じゃ。以後見知りおいておくれ」

難陀龍王の言葉に、那吒は恥ずかしそうに顔を赤く染める。

「さて、もうよろしいか龍王？ 一応、驍廣殿をお呼びしたのは儂なのだがなあ」

閻魔様の声だ。

冥府の閻魔様と言えば、死者の裁判官にして冥界の王。もっと恐い人物像を想像していたのだが、意外と優しい話し方にホッとした。見た目はイメージ通りだけど。

そんなことを考えながら、閻魔様を正面から見つめると――

「驍廣殿、すまん！ お主の『死』は間違いだった！」

「はあ？」

いきなりの閻魔様の言葉に、思わず俺は素で返してしまった。

閻魔様は、薄らと額に汗を浮かべている。どうも、焦っているらしい。

「いや、だからお主は冥府の手違いで死んでしまったのだよ……」

「はあっ!？」

「だから」

「だからじゃなくて！ 俺、今冥界にいるし。肉体はもう茶毘にふされて灰になってるし！」

「うむう、対処が早ければ臨死体験ってことで片が付いたのだが……間違いに気付いたのがつい三日前でな、既に葬式も終わり、戻るべき体も茶毘にふされてしまっておったのだ……」

閻魔様は、話している最中も、チラチラ那吒を見る。

那吒は、顔面蒼白になって震えていた。

「な〜た〜く〜！ お前が原因かあ！」

俺の怒鳴り声で、冥府宮殿が振動したような気がする。

那吒は目に涙を一杯溜めながら、腰を抜かしてしまい、なぜか閻魔様も震えてアワアワしている。難陀龍王だけが、那吒を庇うように俺の前に立った。

「お怒りはごもつともじゃ。されど死んでしまったものは、今さらどうしようもないではないか。まずは気を鎮めて今後のことを話し合おう、のう驍廣殿。閻魔王！ お主もしっかりせんか！」

確かになあ……

事情はどうあれ、一度はスッパリと諦めた人生。それに、閻魔様や龍神様から話をしようなんて言われるとは思ってもみなかった。これもまた面白いかな？

那吒は後でとちめてやるかと思いつつ、話とやらを聞くことにした。

ひとまず、裁きの間から宮殿の奥にある閻魔（もう呼び捨てでいいよな）のプライベート空間に移動し、閻魔、難陀龍王、俺の三人は、同じ卓を囲んだ。那吒は閻魔と龍王の後ろで立ったまま、小さくなっている。女官たちの淹れてくれたお茶やお菓子をパクつき、落ち着いたところで、閻魔が口を開いた。

「それでだ、驍廣殿。もう肉体もなく、肉体を再構築し直すのも不可能だな。元の世界へ戻るには輪廻転生を経るしかないのだ。もちろん、今の記憶は幼児期まで微かに残る程度で、全く新しい人生を新たに始めるということになる……」

「まあ、そうなるんだろうなあ……。加瀬や山崎のセンコー、親父やお袋、それに雅美にも、もう会えないんだなあ……。刀鍛冶になるって思いもなくなっちゃうのかあ……」

ちよつぱり感傷に浸り天井に目をやった。そんな俺の目の端に、また泣きそうな顔をして、さらにその身を小さくする那吒の姿が映る。

アイツもそれなりに反省しているようだ。ここで声をかけると、また泣き出しちゃうかもしれないし、とりあえず放っておくか。と、うちもないことを考える俺をよそに、閻魔は話を続ける。

「そこで特例中の特例なのだが、驍廣殿の生きてきた世界とは異なる次元、つまり異世界へ『転

生』するのはどうだ？」

それは、思いもよらない提案だった。

「異世界への転生の場合は、今の記憶を持ったまま渡ることができる。しかし、異世界へ渡れるのは今生では一度だけなのと、渡る際に姿が今と多少変わってしまうがな。輪廻転生の場合は、転生するまで長くて五十年かかる。それまでは年に三回、春と秋のお彼岸にお盆だな、そのときだけ現世に渡ることができる」

五十年というのは、いわゆる遠忌のことなんだろう。ただ……

「年に三回現世に渡れると言ったって、見に行けるっただけで、会うってことじゃないだろう？」

「まあ、そうなのだが……」

閻魔の答えは身も蓋もないものだった。

しばしの沈黙……

五十年の間だけ、年に三回とはいえ、アイツらの様子を見に行けるのは面白いかもしれない。

弟は刀鍛冶になるだろうか？

加瀬はどんな大人になるか？

雅美——あの姐鬼の夫になるのはどんなヤツか？ なんとなく面白くないけど、見て笑ってやるうか？

「驍廣殿、儂としては異次元、異世界に渡ってもらえると面白いと思うのだがのう」

俺のくだらない妄想を遮るように、難陀龍王が声をかけてきた。

「異世界には、お主の世界より文明が発達しておらんところが多い。そこに赴けば、鍛冶師としての、『腕』が存分に振るえるのではないかと思うのじゃ。儂の知る異世界に、ちょうどいいところがあったな。そこなら直接手を貸すことはできぬが、助言くらいはできると思うのじゃが。どうじゃ、異世界に渡ってみぬか？」

少し考える振りをしていても、龍王には俺の本心がバレバレだったんだろう。自分でも頬が緩んでいるのが分かったから……

自分の心の内を、龍王とはいえ他人に見透かされてしまった俺は、頭を掻きながら苦笑を浮かべた。

「よっし！ 龍王が助言してくれるのに尻込みするなんて漢じゃないな！ そこまで言ってもらえるのなら行ってみるか、異世界とやらへ!! もう面と向かって会えないヤツらのことをウジウジ考えているなんて知られたら、親父や師匠、加瀬なんかには笑われちまうだろう。それに、姐鬼には尻を思いつき蹴とばされて大目玉をくらったまいそうだ。『刀鍛冶』になるって夢を叶えるために、異世界とやらに行くつても悪くはないか！」

俺は自分に言い聞かせるように声を上げた。

閻魔は、難陀龍王の言葉で即決した俺に驚いたらしく、「いいのか？ 本当にいいのか？」と何度も聞いてくる。その表情は、心の底から俺を案じるもので、閻魔の意外な一面を垣間見てしまった。もつとも、俺からしたら「閻魔って心配性なんだなあ……」と苦笑を誘うものだった。

そんな心配症の閻魔に、俺は笑みを浮かべ、

「異世界に行っても、龍王が助言してくれるっていうし、いいんじゃないか。このまま何十年も輪廻転生を待ちながら、現世の人の生活をただ眺めているだけより、思い残すことのないように転生する方が！ それに『夢』が断たれたって思っていたところに、こんな美味しい話をされたんだ。食いつかなけりゃ、もつたないだろう！」

すると、閻魔は安堵した表情になり、

「そうか、そうかしれんのう……分かった！ ではお主を異世界へ送ることにしよう。しかし、異世界に送るには十日ほどの準備期間を要する。準備が整うまでこの冥府で待っておい。身の回りの世話は——」

「私がいたします！」

那吒が声を上げた。

「元はといえば、間違いに気付かなかった私の落ち度。このままでは閻魔王の従者『司命』として失格です。幼き頃の罪を償うために冥府で働いているのに、これでは罪の上塗り。せめて驍廣殿の身の回りのお世話をさせてください」

那吒は、その場で土下座までして懇願した。

龍神様の一族で、媛と呼ばれた女の子が土下座をする姿に声を失った。

この状況に耐えられるわけもなく、早く事態の收拾を、と閻魔を見れば、彼も困ったように難陀龍王へ助けを求める視線を向けていた。

そんな閻魔に、龍王は静かに、なぜだかちよつと嬉しそうに頬を緩ませつつ頷く。それを見た閻

魔は、土下座を続ける那吒に視線を戻した。

「あいわかった！ 驍廣殿の身の回りを世話する役を那吒に申しつける。『司命』として与えた名『那吒』を召し上げ、この後は本来の『紫慧紗』に戻し、己の務めを果たすがよい！」

閻魔が告げた。

すると、難陀龍王は、

「では、十日後異世界に発つ際にはまた参ろうかのう、これでも一応八大龍王の筆頭として何かと忙しい身なのでな」

と言に残して、笑顔のまま颯爽と部屋を出ていった。

忙しいのなら、人間一人に構わなくてもよかったんじゃないか？

まあ、一族の者の不手際から起こったことだから、長としてケジメをつけておきたかったのかも
しれないが……

その後、用意された部屋に案内されたのだが、その部屋がまるでホテルのスイートルームのような豪華さ（テレビで見たことしかないけれど、でもそんな感じ）だった。す、すげえ……

「休む前にお腹へつてない？」

部屋に入った途端、那吒——じゃなくて紫慧紗が聞いてくる。

そう言えば、死んでからこっち何も食べてなかったなあ……でも死者にご飯って？ と思いつつ
も、腹に手を当ててみたら急に腹の虫が鳴りだした。

「死んでも腹はへるんだあ……」

俺の呟きに、紫慧紗がちよっと呆れ顔になって、

「当たり前じゃない。だから、棺に供物を入れるんだよ。冥府に着くまで空腹にならないようにつてね。それに、冥府では現世と同じように、暑ければ汗を掻き、寒ければ凍える。食事もすれば排泄もするし、殴られれば痛いと感じる。現世での五感はちゃんと存在するんだ。五感がないと、現世で犯した行いを悔い改めるために科される『地獄の責め苦』もつらくないから、自分の犯した罪を本当の意味で反省し、来世をよりよい魂で臨むことができなくなってしまうじゃない！」

そのちよっと偉そうな物の言い方に、思わず紫慧紗の頬をつねってしまった。

同時に、なるほど人間死んでも学ぶことは多いなあ、と感心する。

俺は、涙目になっていた紫慧紗に食事を用意してもらう。一緒に食事をした後、風呂に入って寝ようと思ったのだが、彼女がまだ部屋の中にいる。

「紫慧紗。俺、もう寝たいんだけど……」

「うん？ どうぞ、ボクのことは気にしないで寝ていいよ」

いつの間にか『私』が『ボク』になっているけど、これが地か？

「いや、気になるだろう。お前も自分の部屋に戻って休んだらどうだ？」

俺がそう言うと、紫慧紗は申し訳なさそうにモジモジしはじめた。

「ボク、さっき『司命』の職を辞してしまっただから、今まで使っていた部屋を使うってわけにはいかないんだ。だからと言って、今から新しくボクのために部屋を用意してもらうのも女給さんたち

に悪いし……。悪いけど、今日は部屋の端の方でいいから休ませてもらえない？」

爆弾発言！

いきなり女の子と同衾……いやいや、俺は獣じゃない！ただ単に同じ部屋にいただけ!! いるだけ……

そう思いつつも、顔が熱くなっているのを感じた。

「は、端つて言ってもなあ……寝具も一つしかないし……」

俺が、そう言い淀むと、

「もちろん贅沢は言わないよ、かける物を持つてくるから、床で寝かせてもらえれば十分だよ」

紫慧紗は、当たり前のように言う。

「ちょ、ちよつと待て！女の子を床に寝かせるなんて、そんな真似できるかよ！……分かった。俺がそのソファで寝るから、お前は寝具を使え、それから風呂もちゃんと入れよ！」

「えっ！そんなあ、なんでボクが寝具を使っているの？おかしいよ!!」

紫慧紗は、驚きの声を上げる。しかし、俺も彼女の言うことを聞くわけにはいかない。

「そんなもこんなもあるか！いいから言う通りにしとけ。閻魔には黙つていてやるから。いいな！」

俺はまだ何か言いたそうにしている紫慧紗を放置し、さっさと寝具から毛布を一枚取ってソファへと移動し、横になる。

部屋に備えつけられていたソファは、現世で俺が使っていたせんべい布団より断然フカフカで、

あつという間に意識がなくなった。死んでから色々あつたせいで、意外と精神的にも肉体(?)的にも疲れていたのかもしれない……zzz。



ボクの確認のミスで、一人の青年を死者にしてしまった。

間違いで死んでしまったので、成仏するために死者を冥界へと導く阿弥陀光が射さず、現世にとどまっている、という報告が冥府にもたらされたから分かったことだ。

慌てた閻魔王様のお言い付けで青年を迎えに行くと、その人『津田驍廣』は死者とは思えないほど強い『気』に溢れていた。

ボクは、初対面の死者に対して少しでも威厳を持つて接しなければと思っていた。でも、ボクの態度は礼を欠いていたようで怒られて——驍廣は怒つてないと言ってたけど——いつもの弱虫なボクが出ちゃった。……やつぱりボクって駄目なあ……

それにしても、驍廣つてすごい！

普通の死者なら、七日はかけないと辿りつけない冥府までの行程を、たった一日で。

しかも、途中の三途の川を、脱衣婆や懸衣翁と喧嘩したからって、渡し船に乗らずに泳いで渡るなんて……

ボクは馬に乗っていたから大丈夫だったけど、その馬はヘトヘトになってたし、驍廣って本当に死者？

閻魔王様に会ったときだつてそうだ。死者は、本来なら閻魔王様の冥気^{めいき}で平伏してしまうはずなのに、平然としていた。

しかも、一緒に難陀龍王様^{だんたろう}もいたから、龍王様の龍気^{りゅうき}にもさらされていたのに平気みたい。こんな人間に会ったことがない。

でも、難陀龍王様はなぜいらしたの？ もしかして、ボクの失態を知って……

閻魔王の話聞いて、ボクのせいで自分が死んだと知った驍廣……恐かったあ。

ランランと光る赤い目、その背には炎の後光^{ごこう}が見えて……あの後光は不動明王様の伽楼羅焰^{かるらえん}みたいだった。でも、人間の驍廣の背になんで伽楼羅焰^{かるらえん}が？

結局、驍廣は異世界に行くんだ……せめて、それまでの世話くらいはしないと！

そう言えば、どうして難陀龍王様はボクが驍廣のお世話すると申し出たら嬉しそうにしていたんだろう？

まあいいか、これからしつかりお世話しなくちゃ！

お部屋にお連れして休むつてときに、驍廣から寝具を譲られて……男の人にこんなことしても

らったの初めて……何だか嬉しいな。

でも、これに甘えちゃダメだ！ 明日からきちんとお世話しなくちゃ……



「ぐぐよく寝たあ」

昨日は色々あったから、すぐにぐつぐつと寝てしまったようで、清々^{すがすが}しい目覚めを迎えた。大きく伸びをしながら真上を見ると、いつもの天井と違うことに気付く。

ここが俺の部屋じゃなくて、昨日から厄介^{やっかい}になっっている冥府の一室だということを改めて思い出した。

「やっぱり死んだんだあ、俺……」

つい、心の内が口をついて出る。

まあ仕方ないなあ。寝て起きたら夢でしたつてわけでもないから……

何となく気分が下がり気味になりそうだったので、俺は気合を入れるために頬^{ほお}を両手で強く叩いた。

しんみりしていても始まらない！ 昨日の閻魔王の話だと、あと九日間はこちらに滞在することになる。

滅多^{めった}にない機会に恵まれたんだと思って、冥界探検^{めいがいたんけん}とでも洒落^{しゃれ}こもうか！

そう思い、ソファーから上半身を起こすと、寝具の上にはまだ寝ているヤツがいた。

『お世話します！』って啖呵を切った割にはお寝坊さんだな、コイツ……」

俺は独り言を呟きつつ、近付くと悪戯をしまいそうだったので、そのまま見なかったことにして部屋を出た。

現世では毎朝の稽古として、ランニングに素振りやシャドーボクシングなんかをやっていたから、起きると体を動かしたくなる。

紫慧紗が起きてこないことには朝飯にもありつけそうにないので、向こうが俺を探しに来るまでは冥府内の探訪と行きますか！

一人テクテク歩いていると、遠くから気合の入った掛け声や、木と木が打ち合うような懐かしい音が聞こえてきた。

その音は、昨日の裁きの間よりも広そうな部屋からのものだった。扉が開いていたので、ヒョイッと覗くと、赤や青に黄色や黒といった、色とりどりの鬼たちが大きな声を出して稽古をしている。

空手が相撲のような徒手空拳術で立ち合う者や、杖術か棒術なのか木の棒で打ち合う者。それぞれが思い思いに汗を流していた。

「驍廣殿、おはよう。朝早くから、鬼たちの稽古の見学かね？」

いきなり背後から声をかけられ振り向くと、部屋の中で汗を流している鬼たちと同じような胴着

を着た閻魔が立っていた。

「閻魔か！ おはよう。驚かさなくてくれよ、ところでこれは何の稽古なんだ？」

「おお、すまなんだ。驚かすつもりはなかったんだが、夢中になって見ておったようだな。これは捕縛術、護身術の稽古だよ。最近、地獄の亡者どもが昔とは比べものにならぬほど欲望が強くなっておってな、何か気に入らないことがあると平気で逆らって、暴力に訴えてくる輩が増えておるのだ。本来、鬼と亡者では基礎体力や膂力が違うから滅多なことは起きないのだが、亡者といえど、徒党を組んで暴れるとなると、なかなか厄介だな。鬼たちは、何が起きても対処できるようにと日頃から稽古をし、体を鍛えておるのだよ。まあ、何にせよ朝飯の前の一汗というのは、なかなか気持ちがいいものだぞ。お主もやってみるか？」

閻魔の誘いに、俺は気持ち弾む。

「おつ、いいの！ 俺も現世じゃ毎朝、朝飯前に必ず武術の稽古をしていたから、鬼たちの稽古風景を見ていたら、体を動かしたくなってウズウズしていたところだ！」

俺の言葉に、閻魔は嬉しそうに頷く。

「ほお、そうか。ではともに参ろう！」

閻魔はそう言って俺の背中を押すように、鬼たちが稽古をしている部屋の中に入っていく。

俺たちが部屋に入ると、稽古をしていた鬼たちは動きを止め、閻魔に向かって一礼する。だが同時に、一緒にいる俺を見て怪訝な表情をうかべていた。

まあ無理もないだろう。俺は死者なんだから。

部屋の一歩奥に来たとき、閻魔は俺のを見て動きの止まっている鬼たちに気付き、怒鳴りつけた。

「これ！ 何を見ておる、稽古を続けんか！」

鬼たちは、閻魔の声で再び稽古に戻るのだが、どうにも俺のことが気になって仕方がないのか、なかなか稽古に身が入らないようだ。

そこへ、俺よりも頭一つ分以上背が高く、胸回りも倍近くありそうな、筋骨隆々とした赤鬼が閻魔の前に進み出た。

「閻魔王様、その隣にお連れになっている者は一体……死者ではないのですか？」

鬼たちを代表して声を上げたのだろう。その問いに対して閻魔は、どう説明すればいいのか困ったように、

「うーん、死者と言えば死者なのだが……死者ではないとも言えるしのお……」

なんとも歯切れが悪い。すると、赤鬼が、

「死者ならば、早々に地獄なり極楽なりへ送りませんと。何でしたら私が連れていきますが？」

そう言うと、閻魔の許可が出たら即座に俺を捕らえられるよう身構える。その姿を見た閻魔は、首を横に振った。

「いやいや、その必要はない。この者は言わば儂の客だ。仔細は言えぬが、今日から九日間冥府に滞在する。皆も見知り置き、いいな。儂の客人だ、くれぐれもことを荒立てるような真似はせぬようにな！」

赤鬼だけでなく、稽古をしている鬼たち全員に聞かせるかのごとく告げる。

「そうですか……わかりました……」

赤鬼はしぶしぶ引き下がりが、それを合図に、鬼たちの稽古は再開されたが、まだチラチラと俺のことを見ている。

閻魔が言ったから引き下がったが、釈然としないのだろう。『閻魔！ 教育がなっていないぞ!!』

と見ていただけではしょうがないので、俺も稽古を始めることにした。

閻魔に稽古着（袖のない空手着のような服）を借り、現世でしていた朝稽古と同じようにストレッチをしてから、部屋の外周を走る。

走りながら稽古をする鬼たちの動きを見ていて分かったのだが、俺は鬼たちと比べて決して弱くはないだろう。たとえ戦っても、そう簡単に負けはしないのではないだろうか。

薄らと汗を掻いて体がほぐれると、シャドーボクシングを行う。黙々と、部屋の隅でステップを踏みながらジャブ、ストレートをくりかえす。

「おい！ そんな端にいないで、こつちへ来てやったらどうだ！」

でつぷりと太った黒鬼と、それとは対照的な痩せノッポの青鬼が、嫌らしいにやけた顔で近寄ってきた。

どこにもいるんだな、こんなお約束なヤツら。こういうのは、相手にしないに限る。だが、相手はそれが氣にくわなかったらしく、

「無視すんじゃないよ、閻魔王様が『客』だと仰るから親切で声かけてやってんだからよ」

黒鬼がそう言いながら、俺の肩を掴もうと腕を伸ばしてきた。俺はその腕をかわし、

「すみません、気付きませんでした。俺は部外者ですから、皆さんのお邪魔にならないように、端の方を使わせてもらえれば十分ですので、お気になさらずに」

とりあえず波風立たないような対応を取る。しかし、それが自分たちに恐れを抱いていると勘違いさせたらしく、より一層高圧的になり、

「いいから、真ん中の方でやるうや。俺たちがお相手してあげるからよお」

ニタニタしつつ、なおも絡んでくる黒鬼。イラっとするけどここは我慢、我慢……

「そうだぜ。そんな隅っこで盆踊りみたいなことしないで、俺たちが稽古つけてやるからよ」

黒鬼と一緒にあって青鬼まで絡んでくる……まだ我慢だぞ。

「いえ、そんな、悪いですから、自分にお気使ひなく。どうぞご自身の稽古にお戻りください」

平身低頭で何とかやり過ごそうとする俺。だが――

「ゴチャゴチャ言つてねえで、こっちに来りゃいいんだよ」

黒鬼と青鬼二人がかりで、無理やり部屋中央へ引きずり出そうとする。

うん！ もう我慢しなくてもいいよな！

慌てて二人を止めようとする閻魔を、俺は睨んで制止し、さも怯えて困っているかのような顔で連れていかれるのに任せる。

その様子を周りの鬼たちは、ちよつと面白い余興が始まった、という顔で眺めていた。

唯一、閻魔に俺のことを聞いてきた赤鬼だけが、剣呑な顔付きで俺を見ていた。

「さあて、そんなに怯えなくてもいいぞ。最初はオレは手を出さないから、ほら一発この腹に拳を入れてみる！」

俺を部屋の中央に連れ出した黒鬼は、その太鼓腹を撫でながら俺を促す。

「そんなあ……申し訳ないですよ」

とりあえず下手に出ておく。

「いいから早くかかって来い」

「本当にいいんですかあ？」

「さっさとしろ！」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

得意げな顔の黒鬼にすっかり確認した後、その場で軽くステップを踏んで、一気に懐へ。

黒鬼の右斜め前に飛び込み、斜め下から、左フックを右腹側の肝臓めがけ放つ。

俺の左拳は、黒鬼の腹部を抉るように的確に肝臓をとらえた。

打ち終わりに追撃を受けないよう、素早くバックステップで後方に下がり、残心。その後ゆっくりと構えを解き、黒鬼に背を向けて元の場所へ戻る。後ろで「ゴハッ！」と何かを吐き出すような声と、黒鬼が床に膝をついたであろう音がした。

俺はそれを聞いてから振り向き、おもむろに一礼する。

茫然とする鬼たちと「やらかしおった……」と困ったような顔で俺を見つめる閻魔。

数瞬後、面白い見せ物を見ているつもりでいた鬼たちは、慌てて黒鬼のもとに駆け寄り、気絶しているのを確認すると、複雑な表情を浮かべた。そんな中、黒鬼と一緒に絡んできた痩せ青鬼が、俺に向き直り、

「てめえ、何しやがったあ！」

と、怒声を上げる。

「いやあ、かかって来いって言うから、言われた通りに腹へ一発入れただけですが……いけませんでしたあ？」

「なっ、この野郎！」

俺の白々しい態度に、痩せ青鬼が棒を両手で持って、打ち込んできた。

俺は、慌てず今度は古武術の足捌きで青鬼の打ち込みをかわす。

十数回の打ち込みをかわし、青鬼の動きが鈍くなったところを見計らって、ヤツの手と手の間から棒を右手で掴み、左手で痩せ青鬼の手に手刀を入れ、その棒を奪取。すかさず青鬼の喉元に棒の先端を突きつけ、

「で、まだ続ける？」

そう言いながら睨む俺に、青鬼も最初は睨みかえしていたが、徐々に瞳が揺れ、やがてガックリと膝を落とした。

「お見事！ いやーいいものを見させてもらった。某、赤鬼の宇羅と申し、この修練場を牛頭様か

らお預かりしている者だ。そなたの名をお聞かせいただいてもいいかな？」

その場から離れようとする俺に、先程の赤鬼が声をかけて来た。

「俺は、津田驍廣。一応死者ってことになるのかな。昨日こちらに到着して、数日の間、冥府に逗留することになっている」

「うむ！ 先程、閻魔王様も数日間冥府に逗留すると仰られたな……なるほど。津田殿、今の立合いは素晴らしいものだった。呑鬼、蚤鬼にもいい勉強になっただろう。それで、ついでと言つては何だが、某とも手合わせを願えぬか？」

「いや、さっきは相手が俺のことを見てくびってくれたから、その意表を突かせてもらったんだけど……もつとも、アンタにははなから通用しないだろうな。アンタ相当強いだろう？」

渋る俺に、宇羅と名乗った赤鬼は不敵な笑みを浮かべた。

「そうか……しかし、某の申し出を断つても、次から次へと他の者からの誘いがあると思うが……。それでよければ仕方ない、諦めるとしよう。これでも某は、今この修練場にいる者の中では一目置かれている。某と立ち合ってもらえれば、他の者たちも納得し、新たに挑戦する者は随分減ると思うのだがな」

周りに視線を振ると、俺と宇羅を取り囲むように鬼たちがいた。彼らは何がそんなに嬉しいのか、ちよつと笑みを浮かべ、目をランランと輝かせながら今にも挑戦を申し出ようとしている。

その鬼たちの後ろで、俺だけに分かる形で閻魔が謝罪のつもりなのか、顔の前で手を合わせていた。

「はゝあ、鬼って好戦的というか、力のありそうな者に挑むことが好きなのか……。分かったよ、アンタと手合わせをすればいいんだな」

諦めの境地で肩を落とし、渋々了承の言葉を俺が告げると、

「おお！　そうか!!　受けてくれるか！　では早速始めるとしよう。津田殿の得物は何がいいかな？　なんなら、その腰の得物を使ってもらっても某は一向に構わん。もっとも某は『無手』にてお相手いたすが……」

「無手？　徒手空拳ってことか。無手の相手に、脇差を使うわけにもいかないだろ。それに、武具を使うより危なくないし。じゃあお互い無手で」

そう言いながら、俺は腰に差していた脇差を閻魔へと放り投げる。閻魔はその脇差をお手玉しつつも、懐に抱え込んだ。

「そうか……。では！」

宇羅のかけ声で、部屋の中が一気に緊張感に包まれる。

この宇羅って鬼、さっきの二人とは違う。

体から発せられる気迫が全く異なっている。ついでに、なんかユラユラと湯気のようなものも溢れているし……。あれって『気』かな？

これは、俺も注意してかからないと大怪我するかも。気合を入れ直し、丹田に力を込めて、呼吸とともに力を練る。

ゆっくり構えをとりながら、練った力を全身に行き渡らせる。五感を研ぎ澄まし、力が偏らない

ようにリラックスをする。自然体というやつだ。

体を速く動かしなければ、四肢に力を入れるのではなく、行き渡らせるだけにとどめるが上策、とは武術の師匠の口癖だった。

「お互い用意は整ったようだな。参る！」

開始の言葉をその場に残し、宇羅が空気を切り裂き、突きを放ってくる。

俺は、宇羅が繰り出して来た突きを、右腕を手から肘にかけて螺旋を描くように捻りながら払いのけ、そのまま裏拳へと繋げる。

俺の裏拳を、宇羅は左腕で受け止める。

宇羅に阻まれた裏拳を戻すために右腕を引く。同時にその回転運動を利用し、続けざまに左ストレートを放つ——が、宇羅は拳が当たる寸前で距離を取り、回避した。

「やつは、アンタかなりの使い手だね。普通なら裏拳の時点で終わるのに、次の左突きまで難なくかわすなんて」

俺が、一呼吸入れながら宇羅の動きを褒めると、

「いやあ、津田殿こそ、某の突きを払いのけるとは、なかなかどうして侮れぬ。しかも、あの動きは初めて見る払いの動きだが？」

興味津々といった口調で尋ねてくる宇羅。

「ああ、あれは非力な人間が、武器を持った者に対応するために編み出したものでね。俺の習った武術じゃ、払い技の基本であり真髄なんだと、師匠がよく口にしていたよ」



「そうであったか、人間たちの武術にも学ぶ点が多いようだな。さて、それでは続きはどのような武を見せてくれるか楽しみだ！」

宇羅が、不敵な笑みのお手本のような表情を浮かべる。

「ご期待に添えますかどうか」

俺も傲岸不遜に見えるであろう笑みを返す。

次の瞬間、示し合わせたように、お互いの懐へと飛び込んだ。宇羅は上段蹴りを放つ。俺はダッキング（膝を使って体勢を低くし、頭部への打撃をかわす、ボクシングのテクニック）をした後、体を戻しながら、左ボディアッパーを放つ。

宇羅は上段蹴りを放った動きをそのまま利用し、回転しながら後方に半歩下がる。そして、俺のアップパーの打ち終わりを狙って、今度は膝蹴りを打つ。

俺は、膝蹴りを手で受け止め、その勢いを使って後方に飛び、距離を取った。

俺が距離を取ったことで間が生まれる。周りで見ていた鬼たちから溜息が漏れた。どうも、この攻防に息つく暇がなかったようだが、既に俺と宇羅は、次の行動を取るべく予備動作に入っている。宇羅は、また間合いを詰めるため、その場を蹴った。俺は今まで漫画で見て練習していた技を試すべく、より一層丹田に力を蓄える。突きを放とうとする宇羅に対し、足から腰、胸、肩、腕と螺旋を描くように動かしつつ、その力とともに、丹田に蓄えた力をも腕に集め、掌底から解放する。

俺の掌底と宇羅の拳が接触する瞬間、空気の破裂するような音が響き、俺たちはお互いに部屋の端まで吹っ飛んだ。

俺は空中で一回転して無事に着地できたが、一気に力を解放した余波で指先などが震えていた。この技は、やつぱり漫画だから成立するのもかも。使いこなすにはまだまだ鍛練が足りないと思えた。そして、反対側に飛んでいた宇羅へと視線を向ける。

宇羅は大きな音を立てて倒れたが、何でも無いというようにまたスクツと立ちあがり、嬉しそうに笑っていた。多分、俺も同じような顔をしていると思う。

再び部屋の中央に走り寄り、お互い突きを繰り返す俺と宇羅だが――

「驍廣お！ 何やってんの！」

入口の方から女性の声が響き、思わず俺は入口の方を向いてしまった。

声の主を確認し「ああ紫慧紗か……」と思った瞬間、右の頬に熱く硬いものが当たった感触がし――

俺の意識はブラックアウトした。

後で聞いた話だが、気絶してしまった俺を見た紫慧紗は、立ち合いを見物していた鬼たちを掻きわけて、俺に駆け寄り、頭を抱きかかえるようにして介抱しながら、閻魔にさえ食ってかかったらしい。

閻魔が慌てて事情を話そうとしても、紫慧紗は聞く耳を持たず、『鬼ども近寄るな！』オーラ全開で、俺が目覚めますまで周囲を威嚇し続けていたとのことだ。

俺は、目を覚ました途端目に飛び込んできた、瞳に涙を一杯に溜めて俺を見つめる紫慧紗と、それをニタニタと見ている閻魔や鬼たちの姿に恥ずかしくなり、慌てて起きようとした。だが「もう少し寝てて！」と紫慧紗の膝の上に戻されてしまい、そのままの姿勢で彼女の小言を聞かされることになった。ちなみに、彼女の柔らかいフトモモの感触が気持ちよかったことは……ナイショにしておこう。

「朝起きてみれば部屋にいないし、どこに行ったかと思えば、修練場で宇羅さんと立ち合いをしているし！ 大体、宇羅さんは修練場の取り仕切りを牛頭様から任されるほどの猛者なんだよ。そんなことも知らずに、自分の実力もわきまえないで立ち合いに応じるなんて、身のほど知らずも甚だし――」

紫慧紗の小言はともかく、その光景を稽古に戻った鬼たちにチラチラ見られ、その度にニタニタされるのは正直堪らない。

大体、閻魔や鬼のニコニコ顔なんて不気味だ！ いや、人によつては愛嬌があつていいと言うかもしれないが……

そんな衆人環視の羞恥プレイを何とか耐え、稽古を終えた俺に、宇羅が、「朝飯はまだだろう、一緒にどうだ？」

と声をかけてきた。

俺は、紫慧紗が何か言うより早く、「ぜひよろしく！」とお願いした。

もし紫慧紗と二人きりになったら、飯のときまで小言を言われそうなので、逃げ出したかった

のだ。

紫慧紗もはじめは恨めしそうに上目づかいで俺を見ていたが、自分が俺と羞恥プレイを繰り広げていたことに気付いたのか、顔を真っ赤にしながら後をついて来た。

食堂は、修練場並みに大きな部屋で、長机と椅子が一面に並んでいる。ちょうど朝食の時間なので、様々な鬼たちでごった返していた。

「驍廣殿、このお盆を持って部屋端にある配膳場まで行くと、飯を出してくれるからな」

宇羅にお盆を渡され、配膳待ちの列に並ぶと、すぐに順番が回ってきた。

「あれ、紫慧紗ちゃん、今日は食堂で食べるのかい？」

配膳係の鬼おばさんが、俺の後ろに並ぶ紫慧紗に声をかけた。

「宇泉おばさん。うん！今日はこっちで食べることにしたんだ」

配膳係の鬼おばさんと談笑しながら、紫慧紗は配膳を受ける。

そのやり取りを皮切りに、色んなところから紫慧紗に声がかけられる。それを見て、皆に愛されてるんだなあと、なぜか俺の頬は緩んだ。そんな俺の顔を見て、紫慧紗は恥ずかしそうに下を向き、俺の踵を蹴ってきた。

なんか、最初に会ったときとイメージが違いすぎだぞ、紫慧紗！

飯をもらい、宇羅と向かい合わせで長机に着く。配られた飯は、味噌汁のような野菜の一杯入った汁、焼き魚、漬物、生卵に山盛りの丼飯といった和定食だった。

俺と宇羅はその和定食を食べながら、朝の修練場の話で盛り上がっていた。そこへ、紫慧紗が、

「宇羅さん、人間相手に何盛り上がってるんですか？やめてください、驍廣が変に勘違いしま

すよ」

と横槍を入れると、宇羅は、

「紫慧紗殿はご存じないのですか？驍廣殿の『武』は大したものですよ。あのまま続けていたら、

よくて引き分け、十中八九、某の方が負けていたでしょう。もしかすると、牛頭様ともいい立ち合いをするかもしれません」

その宇羅の言葉に、紫慧紗は大きな目をさらに大きく見開いて俺を見た。そんなに驚かなくても……

「ところで驍廣殿、貴殿はなぜそれだけの『武』を身に付けておられるのだ？差し支えなければお教え願えぬか」

宇羅は、興味津々のようだ。それに対し、

「うんう、おれのいづのがぶうで」

と、口に食べ物が入った状態のまま答えると、

「驍廣！口にもものを入れて喋らない、まったくもお」

すかさず紫慧紗が声を上げた。慌てて口の中にあるものを吞み込み、

「家の家風で、『刀鍛冶になるために武術の鍛練をすべし』って教えがあつて、ガキの頃から近所にある古武術の道場に通っていたんだよ。まあ、最近は古武術の道場だけじゃなくて、色んな格闘

技も習ってただけだね。でも、俺くらいの武術の使い手なんて、死者の中にはゴマンといたんじゃないか？」

「いや、驍廣殿ほどの者は初めてではないかな。もともと、普通の死者はもっと生気がなく、『武』を振るうことも少ない。技術として我らに色々と伝えてくれた武術家はいたが、実際に立ち合うことはなかったしな」

「そんなもんなんだあ……」

俺が宇羅の言葉に考え込んでいると、紫慧紗が、

「ところで、ご飯を食べた後は何かしたいことある？」

「やりたいことねえ……」

「驍廣殿、先程武術の鍛練は刀鍛冶になるためだと言われておったが、それならば冥府の鍛冶場でも覗いてみてはいかがかな？」

「冥府にも鍛冶場であるの？」

「刀は打っておらぬが、我らの使う金棒や棍棒などは冥府の鍛冶場で打っておるぞ」

「へーえ、そりや面白そうだなあ……」

思わず俺は呟いた。

「そうかあ、では儂が馬頭に話を通しておこうかモオ」

突然、牛顔の大男が声をかけて来た。

「牛頭様！」

宇羅は、慌てて立とうとする。

「いやいや、宇羅よ、立たんでよいモオ。驍廣殿、今朝は修練場でなかなかいいものを見せてくれたと、閻魔王様から聞いたモオ。鬼たちの『武』の修練を差配する者としてのお礼だモオ」

「そうかあ、そんな大したことはしてないんだが、そう思ってもらえるならありがたい。鍛冶場の件、本当にお願いできるか？」

「了解だモオ、食事がすんだら那……紫慧紗殿に連れていってもらうといいモオ、ではモオ」

牛頭はそう言うと、お盆を配膳場で片付け、俺たちに手を振って食堂を出ていった。

「あれが牛頭かあ、その名の通りの姿なんだなあ」

「驍廣（殿）、失礼でしょ（ですぞ）！」

「おお！ 二人でハモるな！ 現世で絵に描かれる牛頭そのままだったんだから仕方ないだろ」

「だとしてもお！」

俺の何気ない一言を、紫慧紗と宇羅に注意されてしまった。

「ああもお！ いいから、早く飯を食って一休みしたら鍛冶場に行くぞ！」

困った俺は、そうやってはぐらかした。

「もお、分かったよ。ご飯の後は鍛冶場だね」

苦笑しつつ矛を収める紫慧紗に、俺は安心して再び飯を食べる。

それにしても、牛も焼き魚に生卵を食べるんだなあ……

飯を食い終わり、仕事に向かう宇羅と別れた俺は、一旦部屋に戻って身支度を整えた後、紫慧紗の案内で鍛冶場に向かった。

鍛冶場では、馬頭（これまた絵に描いたような馬面！）が出迎えてくれた。

「ブルルウ、お前さんが牛頭の言っていた『驍廣』かあ？ よう来たのう、この鍛冶場は鑄造（ちゆうぞう）主体にやっておるが、鍛造（たんぞう）も多少は採り入れておる。まあ時間つぶしにはなるじやろう。ゆつくり見ていヒン」

そう言って馬頭自ら、鍛冶場の中を案内してくれた。紫慧紗は恐縮しきりだったが、俺としては責任者に案内してもらえて万々歳だ。

鑄造（ちゆうぞう）は溶かした金属を型に入れて作る方法。鍛造（たんぞう）は、金属を加熱し、圧力を加えて成形する方法だ。なお、鍛造（たんぞう）の作業により、金属組織は不純物が抜け均一化し、強度が増す。

馬頭によると、冥府の鍛冶場では鑄造（ちゆうぞう）で金砕棒（かなさいぼう）を作り、一部の特別な棍棒（こんぼう）などを鍛造（たんぞう）で作っているという。鑄造（ちゆうぞう）だと、鍛造（たんぞう）よりも武器としての強度が落ちてしまうからだ。

そうはいっても、金棒などの鉄の塊（かたまり）のようなものを鍛造（たんぞう）で作るなんてなんて想像もできないから、これはこれでありなんだろう。

それに、金棒どうして叩き合うなんてことが起きない限り、鑄造（ちゆうぞう）で問題ないと思うんだが……

牛頭や宇羅が使う棍棒（こんぼう）は鍛造（たんぞう）で作られた物らしく、刀を作るときほどではないが、何度も延ばして鋼（はがね）を鍛え、成形しているとのこと。

また、ごく少数ではあるが鉄鞭（てつべん）や刺股（さすまた）・両刃直刀（りやうばちとう）の唐剣（とうけん）も作られていた。

刺股（さすまた）は言わずと知れた捕縛用の用具。

鉄鞭（てつべん）と唐剣（とうけん）は閻魔のような冥府の高官専用で、儀礼用としての意味合いが大きいらしいが、もちろん十分実用にも耐えられる物だそうだ。

冥府で作られる武具は、亡者（もうしや）が暴徒と化した場合の鎮圧・捕縛用武具がほとんどで、戦う武器としての目的を持った物は少ない。まあ当然と言えば当然なんだが。

その中で、唯一武器として作られている唐剣（とうけん）は目を引いた。

「唐剣（とうけん）に興味があるようですヒン。驍廣殿は現世で鍛冶仕事に携わっていたと聞いたヒン。もし、やるのがなければ、冥府滞在中に一本打ってみてはどうかヒン？」

俺は、馬頭の思いがけない申し出に飛びついた。

「いいのか!? これから九日間、何をやってすごそうかと思っていたんだ。もしいいなら、冥府を旅立つ前に、世話になる札に何か一本鍛えられる！」

「ほお、そうかヒン。ならば、作っていくといいヒン。でも、鍛冶場ばかりでなく旅立つ準備もきちんとしておくヒンよ」

馬頭は笑いながら許可してくれた。

「ああ、分かったよ。じゃあ、さっそく作刀の準備をしてもいいか？」

「気の早いヤツだヒン。今日すぐというわけにもいかないヒンが、明日には、道具と材料を用意させておくから来るといいヒン」

苦笑に変わった馬頭が、俺を落着かせるように言う。

「そうかあ、分かった！　じゃ明日よろしく頼むなあ！」

俺は馬頭に礼を言い、鍛冶場から出た。

「鍛冶場で作刀を始めると冥府見学はできなくなるだろうから、今日の内に冥府の案内を頼む」

紫慧紗にそうお願いし、冥府探訪と洒落込んだ。

冥府に娯楽施設はなかったが、生活するための施設は整っていた。

閻魔をはじめ鬼たちは、皆が妻子を持ち、現世と同じかそれ以上に配慮が必要な人付き合い（この場合鬼付き合いとも言うのか？）をしつつ、質素でも豊かな『清貧』と呼んで差し支えない生活を送っていた。

まあ、冥府や冥界、つまり地獄は、現世で悪さをして亡者となった人間や動物に、裁きを下し、反省させることで魂を鍛える場だ。そこで働く者が、現世よりも淫らな生活を送っているのは示しがないのだろう。

現世では、鬼たちは亡者を責め苦にあわせることを喜び、楽しんでいられると思われている。

だが、実は地獄での仕事は鬼にとっても苦役で、彼らは一日も早く亡者たちが自らの過ちに気付いて反省し、極楽に導かれ輪廻転生することを望んでいるのだと、紫慧紗が教えてくれた。

もともと、食堂で飯と一緒に取ったときに見た鬼たちの顔を見ていれば、そんなことは聞かなくても分かる気がした。

こうして、一日はあつという間に過ぎていった。



翌朝も、前日と同じように修練場で宇羅たちと一緒に汗を流し、迎えに来た紫慧紗も交えて食堂で朝食をすませると、さっそく鍛冶場に向かった。

「よく来たヒン。約束通り、鍛冶場を自由に使っているいいヒン」

馬頭が、炉の前まで案内してくれた。そこには、俺のために用意してくれた鍛冶の道具や材料が置かれている。

現世で日本刀に使用する玉鋼はさすがに用意されていなかったが、冥府の鍛冶場で使われている玉鋼に似た金属『冥鋼』は、俺から見ても十分に納得できる質の物だった。俺はそのままその金属を使わせてもらうことにする。

用意された鍛冶道具を一通り確認した。そして、両手の指を交互に合わせ、ポキポキポキと指の関節を鳴らした。その後、指を反らすように伸ばしてから、手首を振って関節をほぐす。それに続き、肩、首、背中、腰、足と体中をほぐしていく。十分にストレッチを終えたところで、鍛冶衣装の袖を肩まで捲り上げ、仕事の邪魔にならないように紐で襷がけに縛ると、大きく深呼吸をして、気合を入れた。

割り当てられた炉には既に火が入っていて、その熱がジリジリと俺の頬を焦がす。炉の前に立ち、切り炭（木炭を細かく五センチ角ほどに切った物）を炉に投入し、鞆に付いている取っ手を前後に動かす。

日本の刀鍛冶で使う鞆は、西洋の物と形状が異なる。西洋の鞆は蛇腹の袋に口が付いた、アコイデオンのような形状で、蛇腹袋を押し潰すことで口から空気が出る。だが、日本の刀鍛冶で使われる鞆は、木箱の中の仕切り板（狸の皮を使うことが多い）に付いた取っ手を前後に動かすことで、押しても引いても空気を送り込むことができ、微妙な調節が可能となっている。

鞆で空気を送り込み、勢いのいい炎を確認しつつ、炉の中の温度を上げる。表面がゴツゴツした、製錬されたままの金属を鍛冶場の炉で熱し、薄く打ち延ばす【水減し】を行う。

玉鋼の場合は、あまり高温の状態では金鉋で打つと、バラバラに散ってしまうことがある。そのため、低温でゆつくりと熱を入れ軽く叩き、鋼がなじんできたなら叩く力を強くして延ばしていくのだが、冥界の金属に対しても同じ手法をとることにした。

炉の炎に顔を炙られながら、ゴツゴツとした金属の塊をゆつくり加熱する。熱が入り赤くなった金属塊を、金鉋で炉から取り出し金敷（金鉋を振りおろす台）の上に乗せる。力を加減しながら金鉋で打ち、最終的には厚さ三〜六ミリほどの薄さになるまで打ち延ばした。打ち延ばした金属板の熱が下がらない内に水槽の中へ入れ、モウモウと立ちのぼる水蒸気を浴びながら、水槽の中の金属が急冷されていく様子を静かに見つめる。

加熱した後に急冷することで、金属の中の炭素量が過剰に多い部分は水の中で自然に砕け、そうでない部分は砕けず残る。その残った金属板を水槽の中から取り出した。

水減しで不要な部分を除いた金属板を、再び金敷の上に乗せ、細かく割る【小割り】を行う。なぜ、一旦板状にした物をまた小片に割るのかというと、そうすることによって金属の中含ま

れる炭素量の違いを見極め、刀の中心部分（心金）に適した物と、それ以外の表面を覆う部分・皮鉄（刃金・棟金・側金）の材料になる部分とに分けられるからだ。

次に、小割りで選り分けた金属片をテコ棒と呼ばれる金属の棒の上に積み重ねる。このテコ棒は、金属を炉に入れて加熱するときや、金敷の上において鍛錬を行う際に、位置がずれないように持つための棒だ。金鉋よりもしっかりと保持することができ、鍛錬を繰り返す刀鍛冶には必要な道具だった。

そのテコ棒の先端に付けられた平たい皿状の台はテコ台と呼ばれ、このテコ台の上に小割りした金属片を二キログラムほど積み重ねる。

積み重ねた金属片が崩れ落ちないように、水でぬらした和紙で全体を包む。その上から藁灰をまぶし、さらに泥汁を満遍なくかけてから、静かに炉の中へ入れて加熱する。

藁灰をまぶしたのは、空気を遮断し、金属が炉の熱で燃えてしまうのを防止したいからで、和紙で包むのは、金属片が崩れないようにするため。また、泥汁をかけることで、金属片の表面だけでなく、中心までじつくりと熱を伝えられる。

炉に入れた金属片にゆつくりと熱が入るように、炉に送り込む空気の量を鞆で調節する。十分に金属の中に熱が入り、金属の色が鋼色から赤色、そして黄色へと変化するのを確認すると、炉から取り出す。そして、数回金鉋で軽く打ち、積み重ねた金属片が崩れ落ちたりしないか、鍛着（二つの金属を加熱し、重ねて叩くことで融合させること）できる状態か、を確かめた後、再び泥汁と藁灰を付着させ、炉の中に入れ加熱し、金鉋で打つ。その作業を繰り返していく。

一連の作業工程を繰り返すことで、金属片は次第に鍛着し一塊になり、粘りを持つようになる。そうになったら、強く速く金鎚を振るい、次に行う【鍛錬】の準備を整える。

鍛錬は、金属を鍛えることによって金属の中に含まれる鉱滓（金属内に含まれている鉱石母岩の鉱物成分、スラグとも呼ばれる）をはじき出し、金属内に偏在する炭素の量を均一化させることを目指して行われる。

鍛錬の際、一回の加熱で素早く複数回金属を金鎚で打つ必要がある。そうしないと、いくら藁灰や泥汁で金属の表面を保護しても、炉の炎によって金属が燃え、減少してしまう。そのため、鍛錬を全て一人で行うのは難しい。今回、鍛錬には鍛冶場で働いていた二名の鬼が俺の相槌を買って出してくれた。

鬼たちは大金鎚を握り、炉で加熱した金属を俺の指示に合わせて打つ。鍛冶場には俺と鬼たち二人が振るう三位一体の鎚音がリズムカルに響き渡った。

打ち叩きを繰り返して、平たく延ばした金属を二等分するように切りタガネ（小振りの手斧形の道具）で深く溝を刻む。

溝を刻んだ金属を炉で加熱している間に、金敷の表面を水で濡らしておき、加熱した金属を斜めに傾け、金敷との間に僅かな空間を開けた状態で大金鎚を振りおろし、叩きつけるように接地させる。高熱になっている金属と金敷を濡らす水が瞬間的に接触し、小規模だが水蒸気爆発に近い状況を作り、鍛錬によって金属表面に浮き出たカスや切り炭、泥汁、藁灰といった不純物を一瞬の内に取り除く。そして、不純物のない方が内側になるように切りタガネで作った溝に沿って二つ折りに

し、再び炉で加熱し打つ。そのような作業を繰り返す【折り返し鍛錬】を行う。

横や縦、時には三等分するべく二カ所に溝をいれたりしながら、折り返し鍛錬の工程を繰り返して、金属を均一化し『金属鋼』へと生成してゆく。

鍛錬は、炉に入れて加熱する回数が増えるので、金属が燃えるのを防ぐため、適度に藁灰や泥水をつけながら作業を進める。

折り返し鍛錬を十五回程度（心金の場合は五〜六回程度の折り返しにとどめる）繰り返すと、十分な粘りのある金属鋼が鍛え上がる。

積み重ねから折り返し鍛錬までの工程を、【小割り】の際に分けた心金になりえる金属鋼と、皮金に適した金属鋼、それぞれで行う。

別々に行う理由は、日本刀の特性に起因する。日本刀を評するとき、『折れず、曲がらず、よく斬れる』という言葉がよく用いられるが、これは炭素含有量の少ない柔らかい鋼を芯にし、その周りを炭素含有量が多く硬い鋼で包むという技法によって生み出される。そのため、あえて別々に鍛錬を行う。

次に、柔らかく粘りの強い心金を取り囲むように皮金を配し鍛接する【造り込み】に移った。

造り込みのやり方は流派によって異なる。例えば、Uの字型に折り曲げた皮金の中心に心金を入れ包み込む『甲伏』、心金の側面と刃になる部分に皮金を配する『本三枚』、心金を中心に側面、刃面、棟面と四方向から包み込む『四方詰』などがある。現世で多くの刀鍛冶が採用していたのは四方詰だった。

俺は先達に倣い、今回は『四方詰』を採用する。ただし、今回俺が作るのは『刀』でなく両刃直剣の『唐剣』だから、棟面は存在しない。

心金を中心に、二枚の皮金を側面に、もう二枚を二辺の刃になるように配して鍛接する。鍛接した後、いよいよ金属鋼を唐剣の形に打ち延ばす【素延べ】に取りかかる。このときも、炉で熱を入れながら慎重に回数を重ね、無理がかからないように打ち延ばしていく。性急に早く打ち延ばそうとして強い力で行うと、疵などの原因になったり、皮金で覆った心金の中で振じれ、ひどいときには皮金を破って表面に露出してしまうこともあるからだ。

俺と鬼たちは慎重の上にも慎重を期し、金属鋼を熱しては打つを繰り返し、徐々に目的とする両刃の剣の形になるように成形していく。この刀——今回は剣だけ——の形を定める工程を【火造り】と呼ぶ。

火造りでは、ほぼ目標とする形にまで持っていく。刀ならば、焼き入れ後でも棟の方から金鋸で叩くなどして形を整えることができるが、両刃の剣では叩くことのできる棟がないので、焼き入れ後の成形は難しい。そのため、剣など両刃の武器では、火造りの段階での成形の完成度がより一層求められる。

また、剣の厚さ、刃先に向けての勾配も、火造りの段階で定める必要がある。

俺は、この剣を渡すことになる人物の姿を想像しながら成形する。少し肉厚幅広く大振りながら、その人物の腰から唐剣を提げたときに、地面と接触する恐れがない長さにする。そして、仕上げに熱を入れずに剣の表面を叩き締めながら表面を均す【からならし】を行った。

その後、細かい成形のムラをヤスリで綺麗に整え、いよいよ【焼き入れ】の準備に取りかかる。

焼き入れとは、炉で加熱した刀を水槽に投入し、水で冷やすことによって、金属鋼を硬化させる作業だが、剣全体を硬化させてしまつては折れやすくなってしまう。そのため、硬化させるのは剣の刃先のみに限定し、他の部分は焼きが入らない工夫をする必要がある。この工夫のために用いるのが焼刃土だ。

焼刃土は、粘土に木炭の粉や砥石の粉などを混ぜて作る。ただ、焼き入れの加熱中に付着させた部分から落ちてしまわないようにする工夫が必要で、石灰石を含んだ土を使用するといい効果を得られることが多いとされている。

とは言っても、焼刃土の製法はそれぞれの刀鍛冶の秘伝で、俺にはまだまだ手の出せない部分だ。

今回は、冥府の鍛冶場で使われている焼刃土をそのまま拝借させてもらった。

焼刃土を塗る（盛る）方法は色々あるが、俺は一旦刀身全体に厚く塗り、刃先の部分だけ拭きとるやり方にした。

日本刀の刃先は、その刀一本一本に異なった紋様——いわゆる刃紋が浮かび上がっているが、これも焼刃土の塗り方に関係がある。それぞれの流派で伝えられる紋様を描くことで、刃先にも焼きの入る部分と軽くしか入らない部分を作る。それによって強度や切れ味を高めるというが、俺は紋様にはこだわらず、刃と平行に走る直刃紋様になるよう、焼刃土を薄く塗り、しっかりと乾かす。

焼刃土が乾けばついに焼き入れだ！ 焼き入れは刃温度を見極めることが重要で、焼きが入るのに必要な温度に達したかどうかは、加熱し赤くなる刀身の色合いで判断する。

炉の温度を上げ、切先から柄元へ刀身全体に平均して火が通るように加熱していく。鞆^{ふいご}を使って風を送り込み、炉の中の温度を調整する。刀身全体が赤く染まり、焼き入れに最適な温度に達する一瞬を見逃さないために、炎や金属鋼と対話するように一心に見つめる。そして、炎と金属からのサインを見極め、呼吸を止め、一気に水槽の中へ突き入れる。

「ジュワツ」という音とともに、水槽からモウモウと湯気^{ゆげ}が立ちのぼる。焼き入れの完了だ。

その後数回、刀身を炉に戻し、軽く加熱してから水につける【焼き戻し】を行い、焼き入れの際に生じた刀身の曲がりなどを修正する。そして、刀身を砥ぎあげ、刃を仕上げる【鍛冶研ぎ^と】をする。また、柄^{つか}の中に収まり刀身を支える『茎^{なかじ}』にヤスリを掛けた。茎にヤスリを掛けるのは、茎の摩擦係数を高め、柄に収めたとき茎を外れにくくするためだ。最後に、柄と茎が外れないように設ける目釘^{めくぎ}のための穴を開け、茎に作刀者の銘を刻む。銘はいつものように『津田驍廣作』の代わりに、冥府で打ったということで、閻魔王^{えんまおう}の梵字^{ぼんじ}を刻み込んだ。

俺の仕事はここまで。この後は剣として使えるようにするため、鍛冶場にいる鬼の研ぎ師に刀身を砥ぎ、磨きあげてもらう。その後、鞆と柄などの拵え^{こしらへ}を『鞆師』や『白銀師』と呼ばれる拵え師に作成してもらい、やっと完成する。

ナイフなどの短剣に分類される物は、現世でもいくつか作った。だが、本格的に武具としての使用にも、その形状美にもこだわって作った物は、俺が腰に差す『小烏丸造脇差』を除いて初めてだった。

刃渡り二尺二寸（六十六センチ）。柄^{つか}まで入れた全長二尺七寸（八十二センチ）、重さ八百グラム。

両手でも片手でも使える中華風の剣——唐剣^{とうけん}だ。

その刃先には、日本刀の作刀技術を用いた証のように、妖しくも美しい刃紋が浮かびあがっている。いた。

鞆や柄、鐔^{つば}に施された装飾も、鍛冶場の職人（『職鬼』か？）さんが気合を入れてくれたらしい。黒漆^{くろしつ}を使い、丹念に塗り重ねた趣のある鞆。華美ではないが一目見れば丹精込めて作ったことが分かる鐔。そして、手にしっくり馴染むなめし革で表面を覆った柄が付けられ、俺が見ても他人に渡すのが惜しくなるほどの出来栄えだった。

八日間、炉の火に炙られ、金鉋^{かなくわ}を振りおろし続けた汗の結晶。俺に鍛冶場を開放し、作刀にも手を貸してくれた鍛冶場の鬼たちも、満足げな表情を浮かべ唐剣を見つめている。俺の傍らでは、これまで、食事の用意や、汗と埃で汚れた俺の鍛冶衣装や鬼たちの服を洗うなどしてくれた紫慧紗も、できあがった唐剣にキラキラした目を向けている。その様子に俺は、自分が鍛えた唐剣を誇らしく感じた。

その日は、作刀に協力してくれた鍛冶場の鬼たちをはじめ、作刀の許可をくれた馬頭、馬頭に話をしてくれた牛頭と宇羅、そして紫慧紗とともに、食堂で卓を囲んだ。

食堂の宇泉おばさんは事情を察してか、いつもは食堂に置いてない般若湯^{はんにゃとう}（所謂お酒）も用意してくれていて、ささやかながらも楽しい宴になった。

俺は作刀に関わった皆に感謝し、皆は俺の作った唐剣の出来栄えを褒めてくれた。馬頭などは、「異世界などに行かず、このまま冥府に残って儂と一緒に鍛冶師として働くヒン！ 驍廣になら、

冥府の鍛冶場を任せられるヒン!!」

と、盛んに勧誘する。異世界に渡ることは閻魔とともに決めたことだと話すと諦めてくれたが、それでもしきりに惜しんでくれた。

まさか、冥府でのたった数日足らずで、こんなに鬼たち、冥府の住人と仲良くなれるなんて。

現世では、ある事情から俺のことを多くの者が『変わり者』『忌児』と色眼鏡で見ていたので、鬼たちの対応が新鮮で堪らなく嬉しかった。

そして、ついに異世界へ渡る日が訪れた。



冥界滞在最終日。

この日は、朝から周りがバタバタと騒がしく落ち着かなかった。

今日で俺が冥府に滞在するのも最後だと知った鬼たちから、次々に立ち合い稽古を求められた。相手に一撃を入れるだけの立ち合いだったが、俺と鬼たちは嬉々として拳をかわした。

たった九日間ではあるが、一緒に汗を流した鬼たちから、『仲間』として見られているんだと肌で感じ、思わずジーンと来てしまう。だが、後で考えると、何だか昔の青春映画のようで無茶苦茶恥ずかしくなり赤面してしまった。

まさか、俺が拳で友情の確認などということをするなんて。加瀬に見られたら腹を抱えて笑わ

れ、弟や妹には呆れられ、雅美は……一緒になつてその輪に加わったかも？ 姐鬼ならやりかねない……

まあ何にせよ、朝から赤面するような交流をし、その流れで食堂で飯を食い、勤めに向かう鬼たちと別れた。中には「また来いよ!」なんてことを言ってくるヤツもいて、苦笑するしかなかった。次に冥界に訪れるときも死者としてだろうし、今回のような優遇措置は取ってもらえないだろうから、そのときはぜひお手柔らかにお願いします(真剣に!)

朝食後、昨日打ちあがった唐剣を取りに鍛冶場へ行くと、昨夜大騒ぎをした鍛冶場の仲間が待っていてくれた。

「本当にこれでお別れヒンな……。このまま冥府の鍛冶師として働いてもらいたいヒンが、そういうわけにも行かないヒンな。鍛冶場の責任者として礼をいうヒン。これまで耳にはしていたヒンが、実際に人間の作刀を見る機会はなかったヒン、驍廣の仕事を見ることができて、儂にとつても鍛冶場で働く鬼たちにとつてもいい勉強になったヒン。大した物ではないが、餞別として儂の鍛えた棍棒を持って行ってほしいヒン」

そう言うと、俺のために鍛えたという六角棍棒(冥鋼製)を差し出した。その六角棍棒は、鬼たちが使っている物より少々細く、直径約二センチほどだった。また、全長四尺五寸(百四十センチ弱)ほどで、百八十センチ弱の俺の体格に合わせて作られていた。

「どんな異世界へ行くか分からヒンが、危険を伴うような場所の可能性もあるヒン、護身の道具も必要だヒン。閻魔王様が送り出すのだから、いきなり驍廣に害をなすようなものがある場所とは

思わないヒンが、用心しておいて損はないヒン。それに金碎棒かなさいぼうなどと違って、棍棒こんぼうなら武具として見咎みとがめられることはないと思うヒン。儂わがらのことを忘れんように、杖代わりにも使ってほしいヒン」

照れくさそうに言う馬頭。

「俺は自分がしたいことをしたくて異世界に行くだけなんだけど、そんなふうに言ってもらえて嬉しいよ。この棍棒こんぼう、ありがたく使わせてもらう。それじゃ、皆も元気で！」

俺はそう言って唐剣とうけんと棍棒こんぼうを受け取り、馬頭たちと別れる。馬頭たちは見えなくなるまで手を振っていた。

朝の修練場と言い鍛冶場と言い、冥府滞在の間の出来事は、俺にとって心温まるものであり、実に有意義だった。

その思いを噛み締めながら、俺は隣を歩く紫慧紗に、

「間違いで死んだって聞いたときは『なんでだ！』とお前や閻魔を恨うらみただけれど、今思えば冥府に来てお前をはじめ牛頭、馬頭、鬼たちや閻魔と触れあって、現世ではあまり体験できなかった他人の心の優しさってヤツを体験させてもらえてよかったよ。ありがとうな」

そう声をかけると、紫慧紗は一瞬、ビクツと体を震わせ、下を向く。

「何言ってるんだよ、馬鹿だなあ……」

ちよつと怒ったような口ぶりでそう答えたきり黙り込んでしまった。

紫慧紗は、朝からどこか思いつめたような顔をして、何かを必死に考えている様子だった。

冥界めいかい初日から修練場だ！ 鍛冶場だ！ 地獄見学だ！ と動き回る俺に振り回され、その度たびに小言を言っていた紫慧紗だが、二、三日前から時折何かを考え込むようになっていた。

「おい、紫慧しえ（はじめのうちは紫慧紗と呼んでいたが、三日もしない内に俺は『紫慧』と略して呼ぶようになった）、このところ何か考え込んでるみたいだが、どうしたんだ？ 俺のお世話係も今日で終わる。俺が異世界に送り出されれば、後は無罪放免になるじゃないか。何を難しい顔しているんだ？」

俺がそう言うのと、ハツとした顔で俺の顔を見つめるが、また何も言わず下を向いてしまう。

いつもなら「紫慧！」と呼ぶと「紫慧紗だ、勝手に略すなっ！」と突っ込んでくるのに、今日はそれもない。どこか体の具合でも悪いのか？ と聞いても「そんなことはない、大丈夫……」と言っただけ。まったく、冥界最終日くらい笑顔で送り出してくれたっていいだろうに。せつかくの可愛かわいい顔が台無しだ。もちろん、そんなことを言えば余計に機嫌を悪くしてしまいそうだから言わないが。

鍛冶場で受け取った唐剣とうけんを手に、裁きの間まへ行くと、そこには閻魔と難陀龍王が待っていた。

「驍廣殿。今、閻魔王に話を聞いていたところだが、この九日間充実した日々を送っていたようじゃのう」

龍王が笑顔で語りかけてくる。

「思いもかけず冥府で鍛冶仕事をさせてもらったり、鬼たちと一緒に汗を流して仲良くさせてもら

えたんだ。色々知っていくと、鬼たちは現世でのイメージとはまったく違って、いいヤツばかりだったし、なかなか楽しかったよ」

「ほお、それは重畳おもてよう！それで、手に持っておるのが、その鍛冶仕事とやらの成果かな？」

龍王は、目を輝かせながら尋ねてくる。

「目ざといなあ。鋼はがねに似た冥界めいかいの金属を使つて、日本刀を作る方法で打つてみたんだ。冥界めいかいで使われるという『剣』に形状を合わせた。冥界めいかいではこういった刃物武器は、重要高官の儀礼用だと聞いたんだけど、それでもきちんと使える物として、気合を入れて打ったつもり——」

「ふむ、ちよつと見せてもらつてもいいかな？」

俺が答え終わる前に、龍王は今にも俺の手から唐剣とうけんを奪い取りそうな顔付きで問いかけてくる。

そんな龍王に俺は顔を引き攣ひきつらせ、

「うーん……。一応、閻魔に冥府で自由にさせてもらった礼も兼ねて、と思つて打った物だから、閻魔の許しさえあれば俺はいいけど……」

そう言うと、今度は閻魔が、

「おお！ 儂に打つてくれたのか？ てつきり自分のためにやっているのかと思つておった。悪いのう。冥界めいかいを取り仕切る者として、お主を冥府の外に出すわけにはいかなかったが、せめて冥府内では自由に過ごしてもらわねばと思つただけなのだ。それに、お主に便宜を図つたのは、牛頭や馬頭をはじめ鬼たちだしのう」

と、なんだか照れ臭そうに言う。

「鬼たちが死者である俺に便宜を図ってくれることは、普通ならありえないことだろう。はじめて修練場に行ったとき、稽古けいこをしていた宇羅が『死者ならば、早々に地獄なり極楽なりへ送りませんと。何でしたら私が連れていきますが？』と言つていたのを、閻魔が『儂の客』だと言つてくれたじゃないか。その一言で鬼たちは納得し、俺を冥府に迷い込んだ死者としてではなく、きちんと対応してくれたんだ。閻魔が冥界めいかいを治めているから、その一言でごく普通に対応し、修練場や鍛冶場を使つてもいいと便宜を図つてやろうと考えることができたのだと思う。そんな冥界めいかいの住人たちに感謝をし、その代表者である『閻魔王』に貰つてもらいたいと、この剣を鍛えたんだ。まだまだ半人前の鍛冶師が鍛えた剣だから、大したお礼にはならないかもしれないが、よかったら貰つてほしい」

俺はそう言いながら、両手で剣を持ち、閻魔に差し出す。閻魔は、俺の言葉に嬉しそうに何度も頷うなずきながら、剣を受け取った。

「ふむ。そうか、そこまで言つてくれるのであれば、冥界めいかいの代表としてありがたくちょうだいするかな。難陀龍王、先程からこの剣に興味があるようだな。驍廣が鍛えし剣、差し上げるわけにはいかぬが存分にご覧なされよ」

閻魔が、上機嫌で龍王に許可すると、龍王は早速閻魔から剣を受け取る。

「では、閻魔王。失礼して」

龍王は剣を立てて持ち、鯉口こいぐちを切つてゆつくりと刀身を抜き放つ。

刀身には刃紋が浮かび、裁きの間まを満たす光を反射して、僅わずかかに蒼光そうこうを放った。

「うむう……。これはなかなかの一振りじゃのう……。しかも、微かに刀身から冥力が漏れてくる気がするのだが……」

感嘆の溜息をつきつつ、龍王は不思議そうに呟く。

「そうかあ？　もしかすると、刀身に刻んだ閻魔の梵字のせいかなあ？　そう言えば紫慧もはじめて会ったとき、俺の差していたこの脇差から千手観音の力を感じると言っていたからな」

「剣に梵字を刻んだと……まさかのう。すまぬ、驍魔殿ちよつと持ってくれるか」

そう言って抜き身の唐剣を俺に渡すと、龍王は間髪いれず腰に佩いていた剣を抜き、唐剣へ斬りつけた。

「キーン」と言う音の後に、「ギャランギャラン」と、硬いものが床に落ちる音が裁きの間に響き渡る。

突然の展開に茫然となっていた俺たちだったが、裁きの間に響く音に反応して紫慧が、

「何をなさるのですか？　伯父上!!」

と大きな声を上げ、難陀龍王に詰め寄った。

「いやゝすまん。ついどれほどの剣か試してみたくなつてのう。しかし驍魔殿、恐ろしい切れ味だ、とても半人前の鍛冶師が鍛えた儀礼の剣には思えぬぞ」

龍王は、口角を上げながら嬉しそうに、そして目を輝かせて笑っていた。

「『武具は、持つ者の命を護れなければならない』というのが、俺の鍛冶の師匠である親父の口癖であり、津田流鍛冶の口伝だったからな。半人前とはいえ、いや半人前だからこそ、今、鍛冶師と

して持てる力の全てをもつて本気で鍛えた剣ではあるが……。にしても、閻魔への贈り物に、いくら試したかったとはいえいきなり斬りかかるかあ？　傷は付かなかったようだからよかったけど、閻魔にもちゃんと謝ってもらいたいなあ！」

「えっ!?」「なに!?!」

龍王を睨みつけていた紫慧と閻魔は、ここでもうやく俺と龍王が持つ剣の状態に気付いたようだ。俺が持つ唐剣は、傷どころかくもり一つなく、龍王の剣は中ほどで断ち切られ、剣先は床に転がっている。二人は大きな目を一層大きくしていた。

「閻魔王。すまなかった。ちよつと試してみたくなつてのう。じゃが、これで安心して儂の知る異世界に驍魔殿を渡らせることができる。まあ、最終審査だったと思って許してほしい。で、じゃ。

閻魔、差し出がましいようじゃが、この唐剣に銘を贈らせてもらえんかのう？」

そう言う龍王に、閻魔は少々呆れ顔だった。

「銘ですか……まあ結構ですが、いかなる銘を？」

「うむ、裁きの間にて襲いかかる刃を断ち斬った、冥力の備わる剣……。『冥裁』といったところであろうか」

「冥府で裁きに携わる者の佩刀としていい銘ですね。『冥裁』の銘、ありがたくちょうだいしましよう」

嬉しそうに頷きながら言うと、閻魔は俺から『冥裁』を受け取った。

聞いたところによると、この後閻魔は冥裁を愛剣として常に身につけ、亡者の暴動などに対し冥裁を振り、鬼たちを差配し暴動を鎮めたという。その際、冥裁から放たれる蒼光に鬼たちは勇気づけられ、亡者たちは意気消沈したらしい。

「さて、それでは驍廣殿、これより異世界への門を開く。心の準備はいいかな？」

唐劍の贈呈が終わると、閻魔が俺に促した。

「ああ、いつでもいいぞ。ところで異世界ってどんな場所だ？　そういえば、これから行く異世界の何を何も知らないんだが」

「おお、そうであつたな。まあ詳しくは体験しながらの方がいいと思うが、名だけ伝えておこうかのう。その世界の名は『文殊界』。文殊菩薩が司る金剛界曼荼羅の一つじゃ」

「文殊界！　そんな！　文殊界に驍廣を送るのですか!？」

異世界の名を聞いた途端、紫慧が声を上げた。

「今、文殊界は厄介なことになっていると閻魔王様、伯父上、お二人でお話をされていたではないですか！　そんな世界に驍廣を送るなんて……反対です！」

そのまま、すごい剣幕で龍王や閻魔に食ってかかった。だが、龍王は落ち着いて、

「大丈夫じゃろう。驍廣殿は元々大日如来が司り、金剛界曼荼羅の中心に位置する『大日界』の者じゃ。文殊界で何か起きておったとしても、驍廣殿が即座に死の淵に追い込まれることにはならぬじゃろうて」

「しかし……」

龍王の言葉にも、紫慧は納得できないようだ。

「確かに、今文殊界では厄介なことが起きておる。しかし、驍廣が求める鍛冶をする環境については問題ないし、需要もあろう。驍廣の腕があれば、十分によい異世界生活を送ることができるはずじゃ。心配するでない、紫慧紗よ」

論すような閻魔の言葉に、またも押し黙り下を向く紫慧。

「というわけじゃ驍廣殿。向こうに行ってもそれなりに苦勞はするかもしれぬが、人生何事も『修行』と思つて精進するんじゃぞ」

この場を締めるように龍王が言うと、その間に閻魔が何かしらの術を使ったのか、いきなり裁きの間の中央に真っ黒い穴ができた。

「あの穴の先が文殊界じゃ。色々迷惑をかけたが、新たな人生、しっかりとな」

「まあ、頑張ることじゃ、たまに様子を見るでのお」

閻魔と難陀龍王が俺に声をかける。そして、俺は――

「紫慧、いつまで下向いてんだ。これでお別れなんだから、最後までいきちつと顔を見せろ」
いつまでも下を向いたまま恐い顔をしている紫慧に言うが、ビクツと体を強張らせるだけで、顔を上げようとしなない。

仕方ないか。紫慧とつては厄介者が消えるってことだからなあ。

「短い間だったが世話になった、それじゃなあ！」

俺は最後の挨拶をし、穴に一步踏み出そうとすると――

「ボクも一緒に行くうー!」

いきなり紫慧が俺に飛びついてきて、俺と紫慧はそのまま真っ黒な穴の中へと落ちた。



「つー! 馬鹿ーあ、いきなり飛びつくなーあ……」

絶叫を残し、異世界への門の中に消えた二人に、呆気^{あつけ}に取られていた閻魔は、傍らに立つ難陀龍王を少々不安そうな表情で見た。

「……本当に行かせてしまつてよかったのだろうか? 難陀龍王」

「行きたいと言う者を止めることもないじやろう。それにきつと必然だったのじや」

平然としている難陀龍王の言葉に、閻魔は違和感を覚えた。

「必然? それはまた何ゆえに必然などと仰るのです?」

「閻魔王は死者の魂の本来の姿を見ることができはすじやが、驍廣殿はどうでしたかな?」

その質問に、閻魔は澀みなく答える。

「驍廣は、太暗黒天^{だいあんくくてん}――修行を重ね太自在^{たいじざいてん}や不動明王^{ふどうみょうおう}などとも呼ばれておられる方が転生した姿

だと視^みましたが」

難陀龍王は満足そうに頷^{うなず}く。

「さすがは閻魔王、よく見抜かれました。今度^{ことたび}、あの御方は次の修行のために再び人へ転生された様子。いつまでも大日如来様の手の上で修行しておられるだけでは、なかなか次の道が見えず、仏格も上がりませんからな。実を申すと、今回の件はそのこともあったのじやよ」

龍王の言葉に、閻魔は目を見開いた。

「では、今回の一件を仕掛けたのはもしや大日――」

口走る閻魔の口を、龍王は慌てて手で押さえた。

「ご推察の通り。ですが決して口外いたさぬようにお願いいたします。まず、閻魔王!」

そしてニンマリと、それでいて威圧的な目で閻魔を見据える。閻魔は得心^{とくしん}がいったように頷^{うなず}く。

「まあ、そういうことであれば……しかし紫慧紗は……」

驍廣については納得したものの、紫慧紗について不思議に思い尋ねると、龍王は溜息^{ためいき}をついた。

「元々あの者は、九頭龍王の御息女などではありません。紫慧紗とは、九頭龍王の幼き頃の名。その名が示す通り、転生された九頭龍王自身なのじや」

その告白に、閻魔はさらに大きく目を見開いた。

「なんと、突然姿を消してしまい、難陀龍王自らがそのお役目の穴を埋めるべく奔走^{ほんそう}しておられると耳にしましたが、九頭龍王が紫慧紗だったとは……」

「今度の件で、彼の御方は驍廣^{大日如来様}につき従う者が必要であると考えておられました。そんなとき、九頭龍王がまだ幼き頃、太暗黒天^{だいあんくくてん}に体に溜まった毒を吸い出してもらい一命を救われた恩をお返ししたいと申し出たようなのじや。ただ彼の御方は、秘めていた恋慕^{れんぼ}の想いも見抜かれたらしく、驍廣

今の修行にはちょうどよいとお考えになられ、時を同じく転生することをお許しになったのじゃよ。そして、九頭龍王は『紫慧紗』として、儂に迷惑をかけた償いにと、冥界での勤めを直訴してきたのじゃが、きつと今日このときが来るのを薄々感じ取っていたのじゃろう。驍廣Ⅱ大暗黒天にとつて、今度の転生では紫慧紗Ⅱ九頭龍王の秘めた思いを受け止め、成就させることも、大事な修行となるであろうな」

その告白に、閻魔は剣呑な視線を龍王に向ける。

「では、紫慧紗が驍廣殿に付いていったのは、難陀龍王の指示だったのですかな？」

「まさか。確かに紫慧紗が驍廣殿に付いていこうとしておらねば、それとなく私から唆すつもりじゃったが、謀らずもその魂に染みついた『想い』というものは抑えきれなかったようじゃなあ」

龍王の釈明を聞いて、閻魔は笑顔に変わった。

「難陀龍王もお人が悪い。このことを知ったら二人に恨まれますぞ」

「まあ、恨まれるのが年長者の務めと心得ておりますよ。そんな些細なことより、今は二人の行く末に幸多からんことを願おうかのう」

「そうですね。では難陀龍王、あちらの様子を儂にもお伝えください。儂も、冥界より二人の旅が実り多きことを願ういたします」

「分かっておる、閻魔王。ところで、話は変わるのじゃが、驍廣殿の打った唐剣『冥裁』。それを儂に譲ってもらえぬか？」

龍王からの突然の申し出に閻魔は慌てて、

「それはできません。いくら龍王の頼みでも、これは驍廣殿が儂にと打ってくれた一振り！絶対に手放しませんぞ!!」

「そんなことを言わずに。ほれ、儂の剣はこの通り断ち切られてしまっておる。冥界からの道中何があるかわからぬ。どうか譲ってもらえぬか」

「お断りいたす!」

「そこを曲げて」

「龍王も存外諦めが悪い。駄目なものは駄目と言うに!」

「ケチ閻魔あ、儂に譲れゝえ!!」

そんな押し問答が続き、亡者の裁きが遅れてしまった。冥府では極秘にされたが、阿弥陀如来にバレ、こつぴどく叱責されたのは後々のお話。